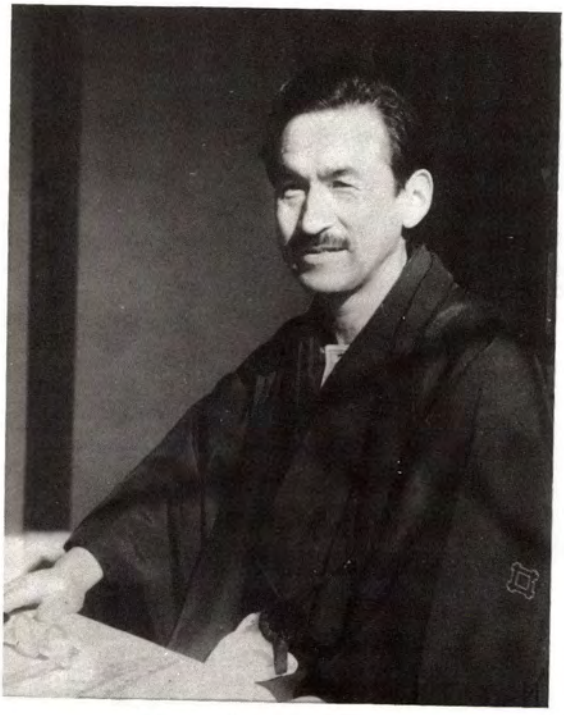
井上孚麿 秀歌集



著　　者（昭和29年１月２日）63歳

しきしまのみち—日本の本道を貫く
井上孚麿先生の不滅の御声を伝へよう

明治神宮宮司　高澤信一郎

神宮の要務で井上先生の許に参上したのは昭和四十年代であった。既に老境に入られた先生と間近に坐して、暫し親しく語って下さった真に温和な御様子を今以て忘れることは出来ない。

憲法学者であられると同時に歌人としても優れた方であるとは夙に承って居ったが、今回ここに『秀歌集』が世に広く出されることとなり、而も其の序文の御依頼を受けるの光栄に浴し、今更あらためて往時の先生の親しみ深い御声に耳を傾ける感が一入である。

祖国の正しい隆盛を祈念せられ、その為めには何を措いても憲法の上に眠ても覚めても速かなる大日本帝国憲法復原の御理想への諸構想で常に御頭脳が一杯であられた事であらうと拝察せられ、其の感懐の迸しりが折に触れ時に臨んで幾多の名歌が生れるに至ったと存ぜられるのである。

寛克彦先生と三井甲之先生。此の両先生と井上先生との御縁故の深大なるは、本秀歌集を流るる源泉を為すもので忘れてならない所である。が、更に溯っては畏くも明治神宮両御祭神の『御集』に籠められた大御心への帰一こそは、蓋し井上先生の真心の根本拠点を成すところと申し上げることが出来ると信ずる次第である。

井上先生は御一生の内、一二、九三七首に上る多数の歌を遺された。尊い御生涯を偲び上げるには、当然これらの歌を一つ一つ心を籠めて謹誦いたすべきである。

それはそれとして、今回は茲に常日頃、何遍ともなく先生の御声に親しみつつ、我々の歌境をも高め清める術(すべ)にもと、先生と日頃より格別親しき人々の手によって恰好の秀歌集が上梓された事は、独り歌道に志す人々のみならず、広く憂国の志止みがた

き仁々にあつても、正に炎天下に渇を癒やす仕合せに巡り逢うの感を覚ゆるであらう。

終りに当って、井上先生の憂国の至誠の御声を、此の『秀歌集』の普及によって、世の人々の多くに伝播し、一日も速かなる我が皇国体の真義闡明に成果の挙るよう、各位と倶々に協心努力いたすことを、強く固く先生に御誓ひ申し上げるものである。

昭和五十八年九月十三日午前一時謹記。

明治四十五年の此の月此の日は
明治天皇御大喪儀の当日也。此の夜、
乃木大将御夫妻の殉死せられたるを
追想申し上げて感深し。

いくそたびかきにごしてもすみかへるみづやみくにのすがたなるらむ

今この先覚八田知紀大人の秀詠が何故か急に胸に浮びて、悠久に亘る我々皇国民たるの使命と責任との重且つ大なるを痛感せられるのである。

輝やかしき皇紀二千六百年より程もなく、来る昭和六十五年は、正に皇紀二千六百五十年を迎ふ。

此の年たるや、明治天皇より御下賜の教育勅語が奉戴満百年と相成り、而も大日本帝国憲法施行以来、同じく満百歳を迎へる。即ち我が国史の上に於ける極めて重要な節目の佳き年と申す可きである。

有為の人々よ、今や総力を結集して、肇国の大理想実現に邁進いたす秋は茲に到来せり。

凡例

一、この歌集は著者の壱万弐千余首の詠草の中から秀歌と思はれるものを選出したが、戦時中の著者の考へ方や姿勢を示す歌と、戦後の占領憲法無効大日本帝国憲法復原の信念と祈りを示す歌は特に多少追加した。

二、歌は内容により、相聞、歌、挽歌、自然、神、生命(いのち)、国、憲法、旅、折にふれて（述懐）と大別し、その各〻は製作の年代順に配列した。

三、文字は著者の原稿の通り歴史的かなづかひであるが、難読の字には読みかなを付した。これは著者の好まれざるところであったが、読者の便を考へて編集者が付したものである。

四、各歌の左下に製作の年月日を記した。（大 15）は大正十五年、（昭 21・4・3）は昭和二十一年四月三日のことである。

五、歌に ※、◎、△、☆ の記号を付し、下の欄に各々説明を記した。

※……注解の記号　歌或は特定の用語に対する注解を示す。
◎……枕詞（まくらことば）の記号　下欄に枕詞の係る言葉を示した。
△……語釈の記号　下欄に一般の解釈と特別な使用の場合はその歌における解釈を示した。
☆……類歌、類句あり、下欄にその部分の類句を記した。

六、歌に㈠㈡㈢と番号を付したものは連作を現はす。

七、選歌の方法については後記に詳述した。

八、声に出して一首を三度以上繰り返して読めば歌の意は自ら通づると思はれる。

目次

遺影
序文……高澤信一郎……一
凡例……五
井上孚麿 秀歌集
相聞……（六首）……一
歌……（十一首）……四
挽歌……（二十一首）……八

自然……（四十六首）……一六
神……（五十三首）……三三
生命……（三十二首）……五〇
国……（四十九首）……五八
憲法……（二十首）……七五
旅……（二十五首）……八二
折にふれて……（百十八首）……九一
著者略歴……一三
後記……安元繁行……一三五

井上孚麿 秀歌集

相聞

印度洋上にて

大空に雲△なたなびきいもとわがこころをかたるこよひのつく夜　（大15・5・28）

ふるさとのさびしき窓になれもまた仰ぎ見るらむこよひの月は　（大15・5・28）

※著者は大正十五年五月より昭和三年三月まで台北帝国大学憲法講座担任のため文部省在外研究員として独英仏に留学。その渡航中の詠。

△雲よたなびくな

(一)

△①ちよろずの人はあれどもみやこぢはうつろのごとし君いまさねば　△②

（昭12・3・4）

※五首連作の中の二首
△① 千萬の、たくさんの
△② 中に何も満たすものがなく、からであること。心がむなしいさま

(二)

△むらさきのひともとゆゑにむさし野を花咲くそのとおもひしわれか

（昭12・3・4）

△むらさき草、根から赤紫色の染料をとった

待てど待てど吾子は来らず草むらに虫の声して今日も暮れゆく

（昭18・夏）

※蓼科にて

雲

この見ゆる雲☆のはたてに君ありとおもふこころはたのしかりけり

（昭33・1）

※昭和三十三年宮中歌会始預選歌

☆山のかなた
森のかなた
海のかなた……としたる
類歌あり

歌

くにたみのかなしき歴史(ふみ)をかたり継がむ詩人(うたびと)生(あ)れよ大和の国に

（大 7）

わがうたふうたのこころは神△ながらきたひあげたるやまとだましひ

（大 15）

△惟神、神代からのまま、神のみこころのままの意で人為を加えぬさま

目にうつり耳に聞こゆるさながらをうたへば神のたたへ△
ごとかも

（大 15・7・1）

※ドイツにて
△徳をほめる言葉、讃辞

わがうたふうたはもわれのうたにあらず天地△①すぶる神の
いぶき△②ぞ

（大 15・7・19）

△① 天地を統一する、天地を支配する
△② 息を吹くこと、呼吸

うちに湧くいのちのいづみせき△①あへずたぎち△②あふれてう
たとなりけむ

（大 15・7・19）

△① しっかりとせきとめられない
△② 水がわきかへり逆まきあふれる

おしろいも衣裳もいらずすはだかのこころのままをうたへうたびと

（昭 5）

さざなみのあるかなきかのさゆらぎのか☆そけきひびきうたにうたはむ

（昭 6・10・1）

☆おとなき音を聞くがともしさ（昭 12）

生き死にのさかひにありて詠み出づる歌にしるけし君が△いのちは

（昭 17・9）

△はっきりしている

(一)

※かかる世に歌など詠みてありふるはすめらみくにのおみの道かも

(昭21・4)

※敗戦の翌年、日本は精神的にも物質的にも疲弊困憊、混乱の極であった。

(二)

気違ひになりなむよりはまだしもとおもひかへせば歌も△詠むべしや

(昭21・4)

△歌も詠むべきであらうかなあ

◎しらぬ火のつくしのくにの火の山の阿蘇の火むらと燃ゆる歌かも

(昭49)

※歌集『火の山』をよみて

◎枕詞「つくし」にかかる

挽歌

泣き泣きて泣きてののちによみがへる奇しきちからをわれはいのれり

（大15・6・27）

なき人を恋ふるこころになき人のいのちこもるといまは知らなむ

（大15・6・27）

(一)

北白川宮永久王殿下蒙古にて戦死せらる。九月十八日
豊島岡斎場よりの帰途

堪へ堪へしこころゆるべかにはたづみ流るる涙とどめかねつも　（昭15・9・18）

○「流る」にかかる

(二)

打ちむせびなくなる雨かをぐるまの窓うちしぶきながるる雨は　（昭15・9・18）

△車。を―接頭語

母九十一才にて死去 (一)

ありし日にいつきたまひしみおやらのみもとに君がやすくいまさむ　（昭18・10・5）

※母の死を悼む歌は十一連作にて四十六首あり、その中より三首をとる。
△心身のけがれを清めて神に仕へる。大切にかしづく

葬式 (一)

○たらちねの母のみたまを今日よりは神といつかむことのかなしさ　（昭18・10・7）

○「母」にかかる

(二)

みをしへにたがふことのみおほくして過ぎ去にし日をいま悔ゆるかな　（昭18・10・19）

なき人をおもふこころに詠み出づる歌にこもらむ人のいのちは　（昭29）

わが友を黄泉(△よみ)におくると春さむきひさめのあめに濡れつつぞ来し　（昭34）

△よみのくに、あの世、冥土

※寛先生御逝去のことを病床にて承りて

㈠

まどろめば夢にぞ見ゆるありし日の君が面影われをはなれず　（昭36）

※寛克彦博士は東京帝国大学法学部教授にして惟神の道の泰斗なり

※一首目の歌は昭和十六年十八年にもあり。

㈡

ゆめうつつうつつかゆめかよるひるのけぢめもあらず君とわがをる　（昭36）

㈢

寝ればゆめ覚むればうつつひるも夜も君がおもかげはなるるとせず　（昭36）

㈣

どこまでを君がをしへかどこまでをおのがおもひかわかちかねつる　（昭36）

※明朗会二十回忌

すめろぎの治ろしめす国慕ひつつ行きて帰らぬ人をこそおもへ　（昭39）

※国体護持を祈る日本郵船の船員の会にして、敗戦時皇居前にて会員中十二名が自決した
「すめろぎの知ろしめす国したひつつあやめも分かぬ闇路をぞ行く」
筆の辞世の歌あり

※完治氏逝く　㈠

まがなしき君がひと世のおもはれてせきくるなみだとどめかねつる　（昭41）

㈡

人の世はつねかくのみとおもへどもかなしきかなや君がひと生は　（昭41）

荒木大将十津川にて客死の急報に接す　㈠

秋の来て木の葉散りゆくごとくにもしたしき人のつぎて失せぬる　（昭41・11・2）

※加藤完治氏、満蒙開拓の父と仰がれし人。

☆今日のわかれは

△常にこの様なものだと思ふけれども

(二)

天にのぼり土に帰りてとこしへにすめらみくにを守りたまはむ

(昭41・11・2)

幽顕往来

※遠藤重利君の急逝をきく

(一)

黄泉(よみ)にしてわれをおもへかありし日の君が面影はなるるとせぬ

(昭51・2・)

(二)

うちつけにおもひ出づるは黄泉にして君がみたまやわれを呼ぶらむ

(昭51・2・)

※遠藤重利氏は高校教諭にして、著者の著書『現憲法無効論』等の原稿の浄書整理をせし人著書に歌集『富士川』あり

㈢

よみにしてさびしきときはかへり来よありし日のごとかたり合はばや

（昭51）

自然

印度洋上にて

にしひがし八重のしほぢはへだつともともに仰がむ月読△の神

（大15・5・28）

△月読尊―伊弉諾尊の子で天照大神の弟。夜の食を国を治めたといふ神、月のこと

ドイツ、イエナ市にて

いただきは霧にかくれて見えねどもふもとは宵のともしかがやく

（大15・12・12）

みづうみのなぎさの音か松風かまくらに通ふおとのしづけさ

（昭2・6）

※南ドイツ、ヴァルヘン湖畔にて

オーストリー　チロール・アアヘン湖上にて

あめつちの音とふ音は消えうせてわが漕ぐ櫂（かひ）の音のみぞする☆

（昭2・7・6）

☆時のあゆみの音のみぞする（昭19・1・9）

（一）

百舌（もず）の声ひとこゑ高く大空にひびきわたりて秋は来るらし

（昭3・9）

※台湾、台北帝大教授時代に内地の秋を偲びて

(二)

百舌(もず)のこゑ晴れたる空にひびくとふやまと島根は恋ひし△

くもあるか

△恋ひしいなあ

（昭 3・9）

二見浦にて

あけぼのの空か海かのあはひ△よりあらはれそめぬ富士の

高嶺は

△あわい―間、ま、すきま

（昭 3・11・12）

わだつみのはてのはてなる山のへにひときはしるし富士

のすがたは

（昭 3・11・12）

※あかき実は児らがとりけむわくら葉の残るもうれし柿の老樹に

（昭 3・11・12）

※「うれし実は」とありしものを後年「あかき実は」と改められた

※①祝山展望（台湾）㈠

※②たかさごの島の鎮めとむらやまをひきゐて立てり新高山は

（昭 4）

※① 昭和四年夏阿里山に一ケ月滞在中の歌

※② 台湾のこと

㈡

△①さくなだりに落ちたぎつ瀬の早川の早瀬のひびき聞くがまともしさ

（昭 4）

△① 水の勢ひよく流るるさま

△② 心がひかれる

※いかづちの瀬戸の石群潮騒ぎ地震(なゐ)はゆるともくゆると思へや

（昭 5）

※長崎県立平戸高等女学校々歌の一節

※九州本土と平戸島の間の瀬戸

いつのまに咲きそめにけむ庭のべの萩の初花風にゆれをり

（昭 10・10・4）

むらくものほ△びこる雲のうへにしてあふぐもかしこ富士の神山

（昭 11）

△はびこる

山雨

※からまつの林をこめて降り下るこの雨脚のながくもあるかな

（昭18・夏）

※第一蓼科集『白雲集』より。著者は健康上の理由により昭和十八年以降夏季は屢々蓼科高原に滞在す

音

△しみ生ふる木ぐれがもとをゆく水のながるる音かかそけき音は

（昭18・夏）

△素ってゐる

蓼科にて

木がくれて流るる水の底にすむきよきこころは人の知らなくに☆△

（昭18・夏）

☆神ぞ知るらむ
△人は知らない

(一)

◎はなくはしはなは咲けどもそのぬしのこころのはなは咲きもやらぬか

（昭19・3）

老桜 (二)

さきがけて花咲くすべも知らぬ身のおいのなぐさと咲くかこの花

（昭19・3）

明治節の日に

小春日の晴るるをつねと聞きにしををしくも雨の降り出でにけり

（昭19・11・3）

◎「花」にかかる

※故郷の家にて詠まれしもの

この年二月に大臣と参謀総長兼任のことありて、これを憲法違反なりと批判せし著者は政治弾圧をうけ既に退官を決意してをられたものと思はれる

△心を慰さめるたね。なぐさめ

みほりべのさくらもみぢのわくら葉のけふ降る雨にここだ散りぬる

（昭19・11・3）

天そそる山の高嶺を青垣と四方にめぐらす甲斐の国原

（昭20）

走り井の水の水嵩（みかさ）はまされどもみ山は雪の消えもやらぬか

（昭20）

※著者は昭和二十年五月二十五日の戦災にて家屋全焼し、五月三十日より同二十一年十二月まで甲府市千塚の内藤政久氏方に仮寓された

あかねさしむらさきにほふむら山のそびらにしるし雪の白根は　（昭20）

小春日はたのしきものか花やつ手咲きの盛りを蜂のむれ寄る　（昭25）

音

なぎさべに寄せてはかへし引くなみの砂に沁み入る音のかそけさ　（昭25）

霧ふかき日にもあるかな霧の海の底ひにこもる音のはるけさ

（昭28）

熱海にて

打ち見やる磯の崎崎隈△もおちず浪の寄る見ゆ朝のひかりに

（昭29・4・12）

△隅々隈々まで余さず

柿もあれどくるみもあれど朴もあれど広葉がしはをわれはとも△しむ

（昭33）

△いとしく思ふ

蓼科にて

△石走(いはばし)る水のしぶきに濡れて咲くみやまつはぶきいろのさやけさ　（昭33）

△岩の上を激しく流れる。枕詞ともなる

つゆくさ　㈠

つゆくさは愛(は)しき花かもわ☆がゆけばゆきのさきざき咲きて迎ふる　（昭36）

☆朝つゆのつゆのひぬまのひとときの花（昭47）

㈡

つゆくさのつゆのいのちか夏の日のつゆのひぬ間のひとときのはな　（昭36）

水くらき沢辺に生ふる水苔の名は知らずして今日も見ほくる　（昭37）

ふるさとの石ころ小みちかささして歩むもたのし雨にぬれつつ　（昭37）

蓼科にて

椅子によりて一息すれば天も地も秋のけはひのさやかなるかな　（昭38）

白樺のゆるるともせぬ一時をあきつ飛び交ふ秋のしるしに

（昭38）

しなの路の野辺の穂すすき穂に出でて搖るるを見れば秋ふかみかも

（昭38）

紀州白浜

白浜の町のあかるさ海の青砂の白さか空にうつれる△

（昭38）

△白さが空に映ってゐるのであらうかなあ。か―疑問、詠嘆を表はす

南国にわれは来にけり窓のべの松のみどりの長きを見れば　（昭38）

立ちこむるさぎりが中にから松のかげ見えそめて雨は霽（は）れゆく　（昭38）

※第七芽科集『つゆくさ』より

朝明

晴れぬればかくも晴れたり大空に雲一つ見ず今朝の朝けは　（昭38）

つゆくさ㈠

朝まだき人は通らぬあぜ道を行けばここにもつゆくさの
咲く　（昭43）

㈡

つゆくさはどこもかしこも咲く花かわが庭にさへ年毎に
咲く　（昭43）

㈢

朝つゆに濡れて歩めば朝露に濡れて咲きけむつゆくさの
花　（昭47）

あめ降れば百舌(もず)もねぐらにこもるらむひと日は晴れよ百舌を聞△かばや

△聞きたいものだ

（昭45・11・24）

山茶花(さざんくわ)とつはぶきの花と咲く見れば秋更けにけり平戸島根は

（昭45・11・24）

神

天照らす日の大神に照らされてわれら生きをりにしにひがしに

（大15、昭11）

※内宮参拝

すめがみのおなじいのちをわかちつつはらからとなるえにしかしこし

（昭3）

※皇大神宮のこと、天照坐皇大御神を祀る三重県伊勢市に鎮座

外宮

◎さくくしろいすずの宮のすめ神のみけつ神かもこれの大神　（昭3）

※大神神社

△①くはしほこ千足りの国のますらをのにぎみたまこそたふとかりけれ　（昭3）

山室山

山むろに咲くやこの花ことだまの咲きのまにまにさきにほひけり　（昭3）

◎「五十鈴」にかゝる
△食物をつかさどる神
※奈良県桜井市三輪町に鎮座
祭神は大物主大神と申し大国主命の和魂なり伝によれば大己貴神（大国主命の別名）がこの国土を経営し功成るや自らその奇魂幸魂を御諸山に斉き奉ったのが本社の起りといふ。三輪山が神体
△①日本の美称
△②柔和、精熟などの徳を備へた神霊または霊魂
△①言葉に宿っている不思議な霊威。古代はその力が働いて言葉通りの事象がもたらされると信じられた
△②まに。物事の成行にまかせるさま

※金峰山神社

をろがみてわれにかへればみ△あらかのみしめゆらげり風もあらぬに

（昭 3）

※吉野山の奥にある
△御社殿、御殿

生き死にのさかひに人のいたるとき△うつしかるべし神のいのちは

（昭 3）

△現し、現実にある、現に生きている

※石上神宮（いそのかみ）

なみの穂につるぎさか立てあぐみして言問はしけむむかしおもほゆ

（昭 3）

※奈良県天理市大字布留に鎮座。
祭神は布都御魂剣（ふつのみたまのつるぎ）大神
古事記に建御雷神が剣に足組みして大国主命と国譲りの交渉をされる神話がある

㈠

△いつくしき神のめぐみをかしこみてよろこびて生きむよきにあしきに

（昭 8）

△おごそか、いかめしい、美しい

㈡

△まがつびの神ともならせ大直日（おほなほび）の神ともならせまもらせたまへ

（昭 8）

△禍津日神―災害、凶事を起す神といはれる。伊邪那岐尊が御禊ぎをされた時黄泉の国の汚垢から化生した神

△大直日神―大は美称、直日は曲ったことを直す神

㈢

われとわがこころのまよひ断ち斬らむたけふつつるぎ身△①にいつきつつ

（昭 8）

△① 建布都（たけふつ）劍、切れ味のするどい劍、布都御魂劍のこと

△② 身心を清め慎んで神に仕へること

明治神宮参拝

おのが身はかへり見ずしてくにのためつくすこころを目守らせ給へ

（昭9・1・14）

△①まがごとも吉事もうれし玉△⑨ちはふ神のよさしのまま☆とおもへば

（昭9　昭12・10・21）

△① 禍事、わるいこと
△⑨ 霊力を発揮して守る。神にかゝる枕詞
△⑨ 任命、委任
☆ちかひ（昭8）

天照らす皇大神のさきみたまさきわかれつつ今は別れむ△

（昭12・10・31）

△幸魂、人に幸を与へる神の霊魂

皇魂

天照らすすめ大神のくしみたまさきみたまこそたふとかりけれ△

（昭12）

※著書『御製を拝して』の巻頭にあり（戦争に対する反省）

△不可思議な力をもつ神霊

外宮※

これの世に生きとし生☆くる生きもののいのちをひたすこれの大神△

（昭12・11・23）

※豊受大神宮のこと。伊勢の外宮と申す。豊受大御神を祀る。三重県伊勢市に鎮座

☆生ける（昭39）

△養ひ育てる（日足す）

土の宮※

生みなさぬものなしといふ◎あらがねのつ☆ちを敷きます神はこの神

（昭12）

※47頁に「注」あり

◎枕詞、土にかかる

☆つちのもなかのつちはこのつち（昭43）

※風の宮

☆くがを吹きうみ吹く風のおほもととこのみあらかのみしめ搖らげり

（昭12・11・23）

※豊受大神宮の別宮にして神宮域内にあり
祭神　級長津彦命、級長戸辺命
☆海を吹き地を吹く風のおほもととみしめゆらげり風もあらぬに（昭40）

※広田神社参拝

△①みいくさのみ△②いつのもとをとめ来れば△③あやにかし△④こきこれのみやしろ

（昭12）

※兵庫県西宮市に鎮座
天照大神の荒魂を祀る
△①皇軍、御軍、皇師、天皇の率ゐる軍隊の敬称
△②強い御威勢
△③たづねてくる
△④たいそう、甚だしく
△⑤おそれおほい

広田神社にて

△はしきやし小葉のみつ葉の花つつじうすももいろの花咲きにけり

（昭13・4・1）

△かはいい

はてもなきおほわだつみの潮の音にただに聞くべし神の△⑧よごとは

（昭14・10）

△① 大海
△⑧ 直接に、ぢかに
△⑨ 寿詞　神をほめたたえるとともに誓ひ願ひなどを申し述べることば

※都万神社参拝（一）

わかくさのつまのやしろをとめくれば宮の内外は荒れに荒れつつ

（昭15・10）

※宮崎県宮崎市近郊にあり木之花咲耶姫を祀る
◎「つま」「思ひつく」「にひ」「わかく」にかゝる

（二）

「※八紘之基柱」と人はさわげどももとつみやどはかへりみなくに

（昭15・10）

※宮崎市に皇紀二千六百年（昭和十五年）の奉祝事業として「八紘一宇」の理想を現はして建てられた大石塔

(三)

いそのかみふるきこころはわすらえてただ目のさきのことになづめり

(昭15・10)

○「古る」「降る」「振る」にかゝる

(四)

※目のさきのきらびやかなるさまをのみ見つつしあるかひなもみやこも

(昭15)

※昭和十五年は紀元(皇紀)二千六百年として国を挙げて奉祝の気分が満ちてゐた(西歴一九四〇年)

(五)

みこころはやすまるまなくただひとりうれひますらむわが大君は

(昭15)

△①うちつけにおもふこころのたまゆらに神あもらすとおもふかしこさ

（昭16・10・9）

△① 突然。だしぬけに
△② しばらくの間、しばし、瞬間に
△③ 天からお降りになる。天降るの敬語

思兼命（おもかねのみこと）

かりそめにものは思はじ思兼の神にいつきてものはおもはむ

（昭16・10・9）

△身心を清め慎んで神に仕へる

※桃山御陵参拝

をろがみてわれにかへればみささぎの松のこずゑに蟬のこゑする

（昭18・5・11）

※京都市伏見区にあり明治天皇御陵

※のちのつきのわのひがしやまのみささぎ
後月輪東山陵参拝 (一)

「※ちりかかる松のふる葉」のふるごともふりしむかしとおもほえなくに

(昭18・5・11)

(二)

大君のみ△けしの袖にかかりけむ松のふる葉か松のこの葉は

(昭18・5・11)

(三)

「※鉾とりて守れ」と宣らすみ△こともちて仕へまつるかこれの鉾杉

(昭18)

※京都市東山区今熊野にあり
孝明天皇御陵
※明治天皇御製（明治四十年）
月の輪のみささぎまうでする袖に松の古葉もちりかかりつつ
△衣服の敬称、お召しもの

※孝明天皇御製
鉾とりてまもれ宮人ここのへのみはしのさくら風そよぐなり
△天皇の御言を承って

(四)

過ぎし世のことにかへり見行く末をおもひはかりて今をつつしめ　（昭18・5・11）

後月輪東山陵参拝後

ゆく末はとにもかくにもただいまの世のありさまはなにといふべき　（昭18・5・11）

※護王神社にて

大神のみたまのふゆを(△1)かがふりてもとつみのりをまもりまつらむ　（昭19・5）

※京都市上京区にあり和気清麻呂、和気広蟲を祀る

△1 天神または天皇の御稜威、御恩、御加護を尊んでいふ語

△2 お受けする、かぶる

ありがたき神のめぐみとかしこみてやまひいやさむおもふことなく☆

（昭19）

☆よろこびて生きむ吉きにあしきに

※多摩御陵参拝

しづかなるこのおほまへにさもらへば世にはことあるときとしもなし△

（昭19・2・23）

※東京都八王子市にあり大正天皇御陵

△貴人の命令を待ってそば近くに控へる

神社整理

人はただ神のまにまにあるべきを人のまにまに神をはかれり△

（昭19）

△……に従って、……につれて

身は摧け艦は沈みしたまゆらに神となりけむ君がみたま△は

（昭20）

△ここでは「その瞬間に」の意なり

明治神宮参道にて

呉竹の代々木の宮は黄朽葉の散り来る中を参ゐのぼりゆく

（昭25）

御遷宮奉祝

天照らす皇大御神天が下四方（よも）をめぐると宮うつりせす

（昭28）

明治神宮御遷座祭を拝して

㈠

国は破れ世はみだれゆく時にしてみあらかは成るもとのごとくに

（昭33）

㈡

み光をあふぎかしこみ民らがみづのみあらかつかへまつりし△

（昭33）

△美しい御殿をお作りした

㈢

みあらかはすでにも成りぬみこころのままに成らせとこひのみまつる△

（昭33）

△こひのむ―願ひ祈る、神仏に祈願する
まつる……するの敬語

内宮

☆これの世に生きとし生ける生きもののいのちのもととい
ます大神　（昭39）

☆あなかしこありとあらゆるものみなの（昭43）

※土宮

海くぬがひなにみやこに連らなれる☆土の最中（もなか）の土はこの
土　（昭39）

※豊受大神宮の別宮にして神宮域内にあり。祭神　大土乃御祖神

☆土をしきます宮はこの宮海の底に町の巷につらなりて尽きせぬつちのもとつみやしろ（昭12・11・23）

風の宮橋

神風やみもすそ川のながれにはもみぢかつ散る風もあら
ぬに　（昭39）

△① 五十鈴川の一名
倭姫命が裳のすそを洗ったことからの命名といふ

△② 一方では、同時に

内宮

おろかなるこころにかかるひとことをいのりいのらむ外なかりけり　（昭43）

※宗像（むなかた）神社

沖つ宮ましますといふ沖の島のけふは見えざり秋ぎりのして　（昭43）

※諏訪大明神

神と人とまつりさきはふひとすぢは昔も今もかはらざりけり　（昭43）

※福岡県宗像郡玄海町に鎮座
御祭神　多紀理姫命、市杵島姫命、多岐都姫命

※長野県諏訪市に鎮座
御祭神　建御名方命、八坂刀売命
御柱（おんばしら）祭は有名

※熱田神宮

みつるぎをいつきまつれるみやしろのことそぎたるぞたふとかりける　（昭44）

※名古屋市熱田区に鎮座
草薙神剣を祀る
△事を省いて簡略にする。質素にする

外宮にて

玉垣にかけつらねたるかけぢからみ手になれりし稲もありとふ　（昭44・10・16）

△㊀懸税＝古代茎のまま抜いて青竹にかけて神に奉った稲の初穂、田租の稲
△㊁天皇が御手づから作られた

※香椎宮想望

武の神をいつきまつれるみやしろに御脱剣所を見るがたふとさ　（昭49）

※福岡市香椎町に鎮座
御祭神　仲哀天皇、神功皇后
△参拝の折、身につけた武具をとりはづす所。標石が今も残ってゐる

生命

△親よ子にながれて尽きぬひとすぢのいのちをわれはいま
ここに生く　（大15）

△親より子に
よ＝よりの上代語

うつし世におなじいのちをわかちつつはらからとなるえ
にしかしこし　（大15）

△親よ子に子よまた孫につらなりてはてしもしらじ人のいのちは　（大15）

○親より子に　子よりまた孫に

人の世のかなしきことを身に統べて起てば身ぬちにちからみなぎる　（大15）

人のため世のためくるしみはたらくに生けるしるしあり△ますらをのとも　（大15）

△人にすぐれて勇ましく、強い男子、立派な男
とも―友人、連れ

△①みすまるのい△②ほつのたまのたまたまにひかるこころをわれはみがかむ

（大15・5・30）

△① 古代の装身具の一つ、多くの玉を糸で貫いて環状とし、首や腕にかけて飾りとした

△② 五百箇　つは接尾辞・たくさん

くらやみにもがきしのちにひらけくるかがやく世界何にたとへむ

（昭2）

※埼玉県比企郡都幾川村の皎円寺（臨済禅）にこの歌の碑あり

△みまかりし人のいのちは生みの子のいのちのうちに生きていますを

（昭3）

△身罷る、死ぬ

くにのため世のためつくすまごころにははがいのちはう△
つしかるべし　（昭3）

△現実に現はれるであらう

身をすてしそのたま△ゆらによみがへり護国の神となりて
生くべし　（昭8）

△ほんのしばらくの間、しばし
ここでは「瞬間に」の意

生き死にのさかひに入るにあらざれば知るにより△なしま
ことのみちは　（昭8）

△手段、方法がない

生き死にのけぢめもしらずただにただにたたかひたたか△

ひたたかひすすめ　（昭8）

△区別。差別

△まがなしきとはのわかれとおもひしをうれしやきみはわ

がうちに生く　（昭8）

△まことに悲しい

ま―接頭辞

◎たまきはるいのちはつねにつながるとおもへどかなしわ

かるるときは　（昭9）

※この歌は詠み人知らずとなって、世に広く歌はれた

◎「命」「世」「内」「わ」にかゝる

もとよりのひとついのちのしるしとてくるしきものか別るるときは　（昭9）

白雲の立ち別れても松が根の絶えずしぬばむもとついのちを　（昭9）

まのあたり逢はぬもよしやたまきはるいのちはただにつながるものを　（昭20）

①「たつ」「絶ゆ」に係る
③「待つ」「絶ゆることなく」に係る
⑤「命」「世」「内」「わ」に係る

命　四月五日か

守るべきものは滅びしここちしてあるに甲斐なきおもひもぞする　（昭21）

※憲法変革
（大日本帝国憲法を廃し占領憲法を押しつけられた）時期の歌

◎①たまきはるいのちは失せてうつ△◎③せみの身はなきがらと生きてある身か　（昭21）

◎①「いのち」「世」「うち」に係る
△現身、現実にこの世に生きている人
◎③「身」「世」「人」に係る

※東京裁判証人

かかるときかかるつとめをつくせとていのちたまひて生きてありしか　（昭22・2・28）

※一連四首中の第一首目なり
第四首目は「ながらへむ甲斐なきいのちながらへて生きしいのちの甲斐はありけり」「八紘一宇」の思想につき証言されしと聞く

くるしみをさがみにさがみ吹き棄つる気吹きに生らむと

はのいのちは

（昭24）

屍の上の汚名といふばかり世におそろしきことあらめや

も

（昭49）

△⑧ さは接頭辞、かみにかむ、かりかりかむ

△⑨ 捨てる

国

みづからの国のすがたを知らざれば知るにより[1]なしとつ[2]

国のことは　（大15・7・25）

[1] 分る筈がない
よしなし―つまらない、手段、方法がない
[2] 外国

しが国のことをも知らでことくにのまことのすがたいか[1]

で知るべき　（大15・7・25）

[1] 其（し）（代名詞）かれ、それ、自身、なんじ
しが国―自分のくに

△神ながら生りに成りにし国なればいつを初めとわかつすべなし

（大15）

△おのづから、自然に出来上がった国

いにしへもいまもかはらぬひとすぢの道ゆくこの身あや△にかしこし

（大15・6・5）

※地中海の船上にての詠

△大へん尊い

◎つがの木のいやつぎつぎにつらなりてひかり添ひゆく天つ日嗣は

（昭3・11・10）

◎「つぎつぎに」に係る

内宮に参拝して

君となり民となりつつすめがみ△のおなじいのちを生くるかしこさ

（昭 3・11・11）

入営する友に

ほことりてまもれますらを皇神（すめがみ）※のちかひおきたるくにはこのくに

（昭 8）

こと国の道てふ道を究めつつ統（す）べに統べてむ神がらの道に

（昭 8）

△皇神「すめ」は接頭辞で皇祖、天皇に関する語に冠して尊敬を表はす。日本の国土をしろしめす皇祖・天皇

※皇祖天照大神が宝祚天壌無窮の神勅により宝祚（あまつひつぎ）の無窮を誓はれた国である

※寛克彦先生を詠みし歌
ことくにの道とふ道もきはめつつ統べに統べけり神がらの道に（昭 12）

おのづからなりたる道と見ゆるかないのちをかけてひらきし道は

（昭8）

皇太子殿下御誕生

天照らすみおやの神のみひかりもひかり添ひけり皇子（みこ）のみ生（あ）れに

（昭8・12・23）

すめろぎの[8]とほのみかど[9]の真柱とわれし立てれば国は動かず

（昭9）

[8] 天皇
[9] 都から遠い地にある役所、ここでは台北帝国大学のこと

きみとたみのなかをとりもつつかさらのこころくもらば△
みくにみだれむ　（昭11）

△役人、管理者

神がらの道のまことを示すとてすめらみくにに生れし君△
かも　（昭12）

※筧克彦先生の講演を聞きし折の作
△天皇の統治する国、皇国
△① 根差す、根がつく
△② 祭る、又さしあげる
△③ 従ふ、服従する
※「御製を拝して」―（戦争に対する反省）巻頭に皇魂、皇国、皇軍、大御心の四首あり
※皇魂「天照らすすめ大神のくしみたまさきみたまこそたふとかりけれ」
皇軍「すめろぎのみいつかがふりたたかへば連戦連勝むかふ敵なし」

皇国

神と人と君と民とのねざし合ひ△①まつりま△②つらふ国はこの△③
くに　（昭12）

大御心

おほみこころいかにいますとかしこみてつとめつくさむ　△つつしんでしのびつつ
みたみわれらは　（昭12）

国のため仇なす仇をことむけて大みこころをやすめまつらな　（昭12）

△言向くーそむいてゐる者をさとし従はせるー服従させる
△願望の終助詞

北京所感（一）

△①たまちはふ△②みかげを△③礙ふる△④むらくものおほへるごとし北京の空は　（昭12・12・26）

△①霊力を発揮して守る
△②神のみひかり。天皇の御稜威
△③止める。じゃまする
△④群れ集った雲

(二)

△①みいくさはすすみすすむになにしかもいつのみひかりいまだ射し来ぬ

（昭12・12・26）

△①皇軍、皇師、御軍
○②何故か、どういふわけか、わからないが
△③威力が激しいこと、尊厳なこと

北京にて (一)

○しきしまのやまとの民もをしへねばけ△もののむれとえらばざりけり

（昭13・1・1）

※支那事変中文部省より視察に派遣されし折の歌
○「大和」にかかる
△けだものの群と同じである

(二)

△かしこしやすめらみことのみいくさのまことの道は人知らずけり

（昭13・1・1）

△恐れおおいことである

すめがみのみかげかがふりすすみゆく道にはさやるもの[⑨]
なかりけり

（昭13・12）

[①]かうむり、お受けして
[⑨]障る、ひっかかる、さしつかえが起る

[①]まへつぎみもおとども[⑧]あれどみこころをやすめまつらむ[⑧]
人なかりけり

（昭15・8）

[①]朝廷に仕える高臣の総称、公卿
[⑧]大臣、公卿などの総称
[⑧]天皇の御心

°かしのみのひとつこころによろづたみつかへまつらば国
威ふるはむ

（昭17・11・28）

°「ひとり」「ひとつ」に係る

あまつ日は照りてもあるかあまつ日のかげさへ見えぬこ
こちする世を

（昭19・2・22）

※記者も学者も競うて大臣総長兼任を絶讃しつつあり

(一)

△①まがごとをまがともしらでよきことと賞めたたへつつあ
△②るがあやふさ

（昭19）

※東條首相が参謀総長を兼任せしは憲法違反なりとし、当時の世論（マスコミ）を批判して詠まれしもの

△① 悪いこと、禍ごと、凶事

△② 禍、曲がったこと、凶事

(二)

△まが事をまがと知りせば千萬の禍はありともやすけから
むを

（昭19・2・23）

△悪事、凶事、災難

(三)

まがごととよごとをわかちまがごとをよごとになほすかみわざもがな　（昭19・2・23）

△禍事の逆、吉事。よいこと、めでたいこと

疎開（一）

仇どものせまると聞けばみかど△①べは立ち去りかねつつとめなき身も　（昭19）

△①皇居の門
皇居　天皇の敬称
△②近い所、ほとり、あたり、みかどべ―みやと

(四)

大君のいますみやこぞいまさらに往なむとおもへやいのち死ぬとも　（昭19）

㊂

火にも焼け餓ゑても死ねや大☆君のみやこをわれは去らむ
とおもはず

（昭19・8）

☆みかどべは立ち去りかねつこの時にして

友の応召を聞きて

吾子も行き吾が子とたのむ友も行きてすめらみいくさ△
ま盛りなり

（昭19・10・1）

△天皇の軍隊、皇軍ここでは大東亜戦争のこと

目に見えぬ神の△くしびをいのりつつつとめつくさむ御民
われらは

（昭19）

△霊妙、ふしぎなこと

武　教

※浪の穂につるぎ逆立て足組ましし神のこころを忘れてお△もへや

（昭19・11・30）

※往来（一）

もとよりのひとついのちを守るとていのちささげむをしきいのちを

（昭20・1）

（二）

☆①ふたつなき生命ささげて守るよりほかなき☆②ものか国のいのちは

（昭20・1）

※古事記に建御雷神が天照大神の使者として出雲国の伊那佐之小浜に到り十掬剣を抜きて波の穂に逆さまに刺し立てて、その剣の前に足組みして、大国主神に国譲りの交渉をされる神話あり

△決して忘れてはならない

※繁は鹿児島海軍航空隊にあり実は海軍経理学校にありと詞書あり。特攻隊出撃の激しき頃なり。一連六首の中

☆①うつせみの　☆②あらめやも　となりし歌もあり

㈢

これの世にまたなきいのちささげつつまもりまもらむも△
とついのちを　（昭20）

△皇国のいのち

㈣

身を捨てしそのたまゆらによみがへりもとついのちといやさかゆらむ　（昭20・1）

皇居も一部炎上とのこと

㈠

仇の火も何かあるべき燃※ゆる火に皇子産ましけむむかしおもへば　（昭20）

※㈠～㈣首目
火のためしは神話（古事記）に木花咲耶姫が身の貞節をあかすため神に誓って密室（八尋殿）に入りて火を放たれ、その燃ゆる火中に皇子を生み給ひしこと。
（日子火火出見命外二柱）

(二)

燃ゆる火のほむらの中ゆ生れましし神のみすゑぞわが大君は

（昭20）

また水のみそぎは伊邪那岐尊が黄泉国より帰り、水中に入りて禊ぎをされし時に天照大神が生れ給ひしことにて、天皇はその御子孫なる故にかく詠まれた。

(三)

罪あらば焼けも死ねとやうけ△ひつつ火中に入りて御子生ましけむ

（昭20）

△神に祈って成否や吉凶を占ふこと。誓約、祈請

(四)

火※のためし水※のみそぎよ生れ出でしすめらみくにぞなに滅ぶべき

（昭20）

醜国 (一)

神国とわれは聞きしを人にだにおよばぬ虫の荒ぶる国か

(昭22)

※敗戦、占領下の日本のマスコミに表はれし世相を歎きての歌なり

(二)

虫よりもけだものよりもあさましき人のすむ世は何といふべき

(昭22)

譫言(たはごと)とおよづれごとの仇花の咲きの盛りか文化日本は

(昭31)

△9 狂って口走る言葉、たはけたことば

△10 他を惑はす言葉、真実でないうはさ

原子炉点火

まがつ火となりなむ火をも消たずしてよろこびの火とな
すよしもがな　（昭32）

△手段、方法があればいいがなあ

皇風無疆

しきしまの大和島根はせまけれどみ空も海もはてなかり
けり　（昭33）

※十首の中の一首

※「日本呪咀」（一）

親ソ族中共族はすみやかに日本を去りて蘇に中に行け
（昭36）

※昭和三十六年頃太陽族、ビート族等が流行し、日本人の自覚なき日本ばなれ現象が起り、更に日本を呪ふ者どもが沢山現はれた。これは単に若者のみでなく世相には、学者・進歩的文化人と称する者の悪影響があった。

(二)

国は敗れ世は変るともとこしへにすめらみくにのみ民ぞ

われは　　（昭36）

△皇御国＝皇国
天皇の統治する国

すめぐにのみいつあがらぬ時にこそともに憂ひむみ民わ

れらは　　（昭37）

△御稜威、強い御威勢

憲法

今日は神武天皇祭なり

とこしへにたがへじとこそのらしけむ※もとつみのりは今如何にある

（昭21・4・3）

△欽定たるべく民約たるを得ず

すめろぎの宣らすみ憲（のり）ぞみ民らが革（あらた）め得べきのりならなくに

（昭21・4・3）

※占領軍により大日本帝国憲法は廃止され昭和二十一年三月六日に憲法改正案要綱が発表された

※明治天皇御製
橿原の宮のおきてにもとづきてわが日本の国をたもたむ
世はいかに開けゆくともいにしへの国のおきてはたがへざらなむ

△君主の命による選定

人定に非ず神定と聞く

うつせみの人のたくみしものに非ず神△ながらなるのりと聞くものを　（昭21）

○「命」「人」「世」にかかる
△神慮のまま、神代からのまま

所謂「憲法改正」成るといふ

吹けば飛び燃やせば燃ゆる紙切れをたのむこころのおろかなるかな　（昭21）

☆のりとしたのむ人もある世か

立法の限界

力はも力を制すむらぎものこころのうちは如何にかもせむ　（昭21）

○「心」にかかる

○うつせみの人のこころは変るとも何変るべき神のちかひは

（昭21）

○「人」「命」「世」にかかる

※力もておしつけられし国☆法に何の権威の有りとおもへや

（昭21）

☆憲法に（昭28）

※占領軍司令官の権力は日本の天皇、国会、政府よりはるかに強いものであり反対や批判は許されなかった

筆

△神かけてわが執る筆の命毛にこもる力はのちもふるはむ

（昭23）

△神に誓って

※『ポツダム宣言に所謂デモクラシーと憲法・国体』『ポツダム宣言と憲法改正』の二書は謄写印刷版にて昭和二十一年発行政界官界要路者に配布す

字に書きし法をたのむは画に描きし餅を食らふにな△ほし　△いつそう及ばない
かずけり　（昭28）

かくばかり乱れたる世に生まれ値ひてみくにをおもふこ
とのかしこさ　（昭29）

かにかくにおもひみだれて寝られぬも生きてある身のさ
ちとおもはむ　（昭29）

世の人は如何にもあれやわれはただもとつみのりを守らむとおもふ　（昭34）

神かけてわが執る筆の命△毛ののちも振はむ時はあるものを　（昭34）

国は破れ世は乱るとも神△からの法のともし火消ゆるとおもへや　（昭34）

※昭和三十四年発行『憲法研究』執筆中の歌
△筆の穂先の最も長い毛。いのちげ
△神ながらの、神代からのままの

今はよし知らずありとも末遂に知らでやむべき道△ならなくに

（昭41）

△ではないのに。といふことはないのに

のちの世も今も変らぬ一筋の道のまことを明かにせむ

（昭41）

※七百年に余る幕府も封建も陋△習としてみそぎはらひぬ

（昭42）

※新憲法は既に定着せりと云ふ考へ方に対して

△悪い習慣

あなかしこ明治維新は憲法の復原なるを人は知らじか☆△

（昭42）

☆「王政の復古」といふは憲法の……

△もとの位置、形態にもどすこと

憲法の無効復原改正を説き出でたるをなぐさめとせむ※

（昭48）

※占領中又は戒厳令下の憲法改正は無効

著書『憲法研究』（昭和34年）神社新報社『現憲法無効論』（昭和50年）日本教文社より出版さる

願はくは今上昭和の御代にしてこのひとことを成らしめたまへ※

（昭48）

※大日本帝国憲法復原のこと、著者の信念は現憲法無効確認、即帝国憲法復原ののち時代に適合せる改正をすべしといふにあり

旅

人々はごきげんようといひにしをつまはえ言はずわかれ△
ゆきしか

（大 15・5・1）

※ドイツ留学に出発の日
△言ひ得ないで

二見浦にて

あかつきのいそとどろこし寄るなみのもなかに立ちてみ△
そぎすわれは

（昭 3・11・12）

△禊ぎ―身に罪や汚れのあるとき、または神事に従ふときに川や海で水を浴びて身を清めること

※塔尾山陵参拝

塔の尾のみささぎまうでする道は落つる木の葉にうづもれにけり　（昭3・11・17）

※吉野山にあり後醍醐天皇陵

◎天さかる鄙の長路を行き行かむすめらみことのまけのまにまに　（昭9）

◎「鄙」にかかる
△ご任命に従って

うなばらは月のひかりに照れれどもわがふるさとは見えずなりゆく　（昭9）

山川もこころは惹かず目を閉ぢて国の行末われはおもへり

（昭11）

☆あひ見むとおもへる君に逢ひもせで過ぐる旅路のをしくもあるかな

（昭11）

☆あひたしとおもふ人にもまゐあはず（43）

※山海関にて

天さかる支那の山にもみひかりのい照り直射す日こそ待たるれ

（昭12・12・26）

※曽て満洲と中国の国境なりし町。中国河北省東北隅の城市、渤海湾岸に位する。万里の長城の起点なり

※樺太に来る

みちのくのおくなるえぞのそのおくの八潮路こえてこの島に来ぬ　△

（昭15・8・16）

※現在ソ連領サハリン。昭和二十年八月一五日敗戦まで日本の領土であった

△北海道のこと

樺太にて（五首）

八千草の花咲く見ればとほつくにからふとじまにありとしもなし　△

（昭15・8・16）

△居るとも思へぬ

◎ひさかたのあめもかくやとおもふまでこのあめつちのながめたへなり

（昭15・8・16）

◎「天」「雨」「空」「月」「月夜」「都」にかかる

行けど行けど山はみ△ながら伐られつつ樹々の切株むくろ
なす見ゆ

（昭15・8）

△全部、のこらず

※国うみのみおやの神のみこともちてつかへまつらむお△み
の子もがも

（昭15・8）

※伊邪那岐、伊邪那美の神
△臣（朝廷に仕へる人）であってほしいものだ

あなたふとすめらみことのみめぐみはことくに人もへだ
てざりけり

（昭15・8・20）

※幌内河口オタスの杜にて
白系露人の親子等の安らけく住むを見て　四首の内

°なまよみのかひの国原△①まほろばにゆ△②ついはむらに湧くか
湯△③むらは

（昭19・2・14）

°「甲斐」にかゝる
△①まほらと同じ、すぐれたよい土地
△②清浄な岩の群、霊力を持っている岩の群
△③甲府市湯村町にある温泉

かたらはむ人こそなけれかまの湯のたぎるを聞けばここ
ろ足らひぬ

（昭19・2・14）

阿蘇登拝（一）

つみけがれきよめの火かも火のくにの阿蘇のみ山に燃ゆ
る火むらは

（昭19・3・28）

(三)

人の世のつみとふつみを身に統べて身を焼かすらむこれの火むらは

（昭19・3・28）

いにしへも今もかはらぬ人ごころ恋ひつつぞ来しあすかの里に

（昭43）

天つ神国つみ神のみやしろのさかゆる時に国はさかえむ

（昭43）

△⑦ 天にまします神、高天原からわが国土に降臨された神、またその子孫

△⑧ 国土を守護する神
天孫降臨以前に国土に土着して一地方を治めた神

※白峯神宮にて

どこよりか庭掃く音の聞こえ来ぬすがすがしもよ今朝の朝明は　（昭43）

※京都市上京区飛鳥井町にある元官幣大社　祭神は崇徳天皇　淳仁天皇

興福寺

興福寺五重の塔のきざはしに夕日を浴びて人を待ちをり　（昭43）

△階段

亡き人のたまの手向けと△今もかもさくらじまやま立つかけむりは　（昭43）

△たむけ―神仏に供へ物をささげること、またその供へ物

青島展望

「※沖つ鳥鴨著く島」と詠みましし島かあらぬかこの見る島は　（昭43）

平戸瀬戸を渡る

ちちははのみたまやわれをまねくらむ見えかくれする闇のともしび　（昭43）

※古事記に、豊玉姫命が鵜葺草葺不合命を産みて海つ国に返りましてのち　その背、日子穂穂手見命を恋ひて「赤玉は緒さへ光れど白玉の君がよそひし尊くありけり」と歌を詠みて献りしに答へて「沖つ鳥かもどく島にわがゐねし妹は忘れじ世のことごとに」と詠まれし神話あり

折にふれて

おもはぬに夜は更けにけり筆おきていまは眠らむふかき　△熟睡

△うまいを　（大15・7・14）

ゆくすゑはものの道理のわからぬをすべて学者と人はいふらむ　（大15・12・17）

※山居

◎あまざかるとつ国のべにわれあればすめらみくにもひろごるおもひす

（昭1・12・31）

※昭和元年十二月三十一日ドイツ、イエナにて

◎空遠く離れてゐる意。枕詞「ひな」「向ふ」にかかる

夢

いまむかしあらはにのことかくりごとむすぶはゆめのちからなりけり（①）（②）

（昭2）

（①）現世のこと

（②）幽界のこと

ひとはまだそれとも知らぬくるしみをこの身にすべてくるしむわれか

（昭3½）

※おのが身は神にささげてすめぐにのもとつみのりを守らむわれは

（昭5・初夏）

※「昭和五年初夏の頃なりしか士山巌に参りし時に口を衝いて出でたるものにして其後余がために根本起請ともいふべきものとなりて今日に及ぶ」と作者の詞書あり、三首連作の内の二首目

第一首

身をつくしこころを尽しすめぐにの本つみのりのこころきはめむ

結婚 (一)

天つ神国つみ神のみことともちて妹△背のちぎり今ぞかたむる

（昭8・2・11）

△いもせ＝夫婦

(二)

妹と呼び背と呼ぶえにしきはまりぬ△ももちよろづの人あるなかに

（昭8・2・11）

△百千萬

㈢

皇神のおなじいのちをわかちつつ妹背となりて生くるたのしさ

（昭 8・2・11）

安雄（弟）を思ふ

☆⑦あめにしてさびしきときはかへり来よ☆⑧はぐくみて生きむありし日のごと

（昭 10）

すめろぎを仰ぐこころの一筋にむすぶちぎりのい△つかしきかな

（昭 10・10・4）

△尊い

☆⑦ よみにして
☆⑧ ありし日のごと語り合はばや（昭 51）

わが親にほめらるるより世の中にうれしきことのありとおもへや

（昭10・10・4）

わがちちのかたみのころも身につけて児等にむかへば子らもなつかし

（昭10）

病む友に

吹く風の流るる水のゆくままにこころ☆をやりてやすらひたまへ

（昭11）

☆ものは思はずやまひいやさむ（昭14）

広島にて

つはものの[1]たむろ[2]の夢に通ふらむ宇品のうらのをしきわかれは

（昭12・10）

[1] 兵士
[2] 人の群れ集まること。またその場所

江の島も富士も見ゆれど君なくてさびしくなりぬさがみの海は

（昭14・9）

入営する友を送る

真弓[1]にも征矢[2]にも代へし筆擱[3]きて銃とりもちて行くか我友

（昭14・8・26）

[1] まゆみ（檀）の木で作った弓。立派な弓
[2] 戦場で用いる矢、実戦用の矢

君が住むあたりはいづこなつかしき甲斐の国原日は暮れむとす

（昭16・3・9）

人に

かへりみてやましからずばさばへなす[⑧]世の人言は[⑨]さもあらばあれ

（昭16・4）

かくこそとおもひしことのかくなりしこのうれしさをたれに告げばや

（昭16・9）

⑧陰暦五月頃に群がり騒ぐ蠅の様にうるさいこと

⑨不本意であるがその通りにしておかう。とまれかくまれ。ままよ

宣戦の詔書を拝して　㈠

宣戦のおほみことのり拝すればとどめもあへずなみだこぼれぬ

（昭16・12・8）

㈡

いにしへも今もかはらぬ一筋のみ△のりをあふぐことのかしこさ

（昭16・12・8）

△ことあげのいやしげくして人ごころみだれみだるる世をいかにせむ

（昭17・11・28）

△御法、法律、法令の敬称ここでは詔書のこと

△口に出して言ひたてること、揚言

◎かりこもの乱れ乱るる人ごころ統べにすべてむすべはあらじか　（昭17・11・28）

親と子と逢ひに相逢ふよろこびにまさるよろこびありとおもへや　（昭18・1・7）

君にうけ君がめぐみに生ひ立ちし子☆等がいのちはまけのまにまに　（昭18）

◎「乱れ」にかかる
△「て」は完了の助動詞「つ」の未然形、「む」は推量の助動詞で意志をあらはす
一つにまとめてしまふ手だてはないものだらうか

☆いのちささげむ時は来にけり（昭19）
いのちささげむまけのまにまに（昭19）
の歌あり
△まけ　官職、官名に任ぜられるままに

△⑦大みうたをろがみよみて朝△⑧にけにこころのちりをはらひ
きよめむ

（昭18）

△⑦天皇の大御歌、御製
△⑧朝も昼も、いつも

繁　十二月十日海兵団に入営

事しあらばささげまつらむいのちぞとを△⑨しみをしみてお△⑩
ほし立てしか

（昭18・12・10）

△⑨大切にし、いつくしみ、可愛く思ふ
△⑩育てあげたのだなあ

△いい行けい行けい行けわが友すめぐににあだなすあだは四よ
方も△にせまるに

（昭19・2・22）

△「い」は強める接頭辞

☆をさな児のなにはおもはずたらちねのははに依りをる身
こそやすけれ

（昭19・5・7）

☆みどり児の

独語

なにごとも統制の世も思ふことひとりごつにはさはらざ△
りけり

（昭19・5・12）

※戦時中言論統制のきびしき頃

△ひとり言をいふ

おもふことおもふがままにひとり言ち歌詠むほどのみち
はありけり

（昭19・5・12）

※新橋駅歩廊にて

みぎひだりい[△1]這ひもとほり媚びつきて年の経ぬればおと[△2]どともなる

（昭19・7・22）

免官発令

ちりふかきちまたの奥にいほりして名もなき民のつとめつくさむ

（昭19・7・22）

棺[△3]を蓋うて事定まらず常世[△4]にもいよよ仕へむ臣の男の子は

（昭20・1・25）

※七首連作の内の一首

△1「い」は強意の接頭辞。

△2 這ひ廻り

△3 大臣

※文部省国民精神文化研究所を依願退官されし折の歌

東条首相の参謀総長兼任は憲法違反なりと批判せしため政治的圧力をうけ禍の他に及ぶを避くるために退官されしと仄聞す

△4「棺を蓋うて事定まる」

中国の諺

人は死して後に本当の価値が分ること

△5 永久に変らないこと

棺を蓋うて事定まらぬいのちぞとおもへばをしきいのちなるかな

（昭20・1・25）

空襲 (一)

家も焼け原稿も焼け本も焼けありとあるもの焼け尽くしたり

（昭20・5・25）

(二)

何も彼もみな焼け果てて燃ゆる火の火中（ほなか）に立てばおもひ晴れたり

（昭20・5・25）

(三)

あがこころあなすがすがし身につもる罪もけがれもみそぎしがごと　（昭20・5・25）

空襲処処

あだの火にひなも都も焼けはててすめらみいくさ今盛りなり　（昭20・5・27）

△皇軍の戦ひ、大東亜戦争

敗戦

乾坤（けんこん）△倒壊日月光を失ふといふもおろかし今日のおもひは　（昭20・8・15）

△天地

いかさまにおもほし召すとおもふときとどめもあへずなみだこぼれぬ

（昭20・8・15）

※大御心を拝察しての歌なり

弁慶橋のたもとにて

ものはみな焼けただれたる中にしてただひとくきの花ぞ笑まへる

（昭20・8・19）

※「渡辺祐四郎君に別れたるのち睡蓮の咲けるを見て」と詞書あり
渡辺氏は明朗会員にて八月二十三日自決す

敗戦

かくばかり稜威（みいつ）振はぬ時にしてつとめざらめや臣の男の子は

（昭20・8・23）

△みー接頭辞、「いつ」の敬称、天皇の強い御威勢

※①清麿もはた正成※②も仕へしは稜威揚らぬ時にぞありける

（昭20・8・23）

※① 和気清麿（わけのきよまろ）（奈良時代）
※② 楠木正成（くすのきまさしげ）（吉野時代）

勝敗 (一)

勝敗は兵家（△へいか）のつねと聞くものを常勝とのみおもはざらなむ

（昭20・8・29）

△軍人或は兵法家の常識である

(二)

勝てりとも驕ることなく敗くるとも平然たるをますらを（△）とせむ

（昭20・8・29）

△人にすぐれて立派な男といふのである

人の巣※鴨に行くを送る

◎かりこものみだれみだるる世にしあればひ△とやに入るもよろこびとせむ

（昭20・11・2）

※巣鴨拘置所（スガモプリズン）戦争犯罪の容疑者を占領軍が指定して収容した所

◎「乱る」にかゝる

△牢屋、獄

ますらをがおもひ建（たけ）びて一筋△につくすまことのむなしからめや

（昭21）

△強い意力をもってしっかりと考へを決める　勢ひこむ

ひとすぢにおもひいる矢△の鳴りかぶら鳴りどよもさむ時はあるものを

（昭21）

△先にかぶらをつけた矢で空中を飛ぶ時鏑の穴に風が入って響を発する鏑矢（かぶらや）

ちからなき身もひとすぢに神かけていのりいのらむ道は
あるものを　（昭21）

みだれたる世に生まれたる甲斐ありとおもひ△建びて生き
むすべもが　（昭21）

△心が高揚して生きてゆく手段はないものかなあ

人知れぬ山のおく△①がに籠△②りのみおもへばくるしくだち△③
ゆく世を　（昭21）

△①おくか、奥深い所
△②こもってばかりゐて
△③「くだち」は末となる、日が傾くこと、衰へてゆく世の中

み冬去り木の芽もはるのおとづれとおもへどかなし世の△
ありさまは

（昭21）

△張る・春―両方に係る
芽が出る、芽ぐむ

今日は神武天皇祭なり※

かしはらのとほすめろぎのみまつりの今日の春日ぞかな△
しかりける

（昭21）

※毎年四月三日は神武天皇祭であった
△天皇の先祖、かしはらのとほすめろぎは神武天皇のこと
※明治天皇御製
橿原の宮のおきてにもとづきてわが日本の国をたもたむ
橿原の宮のおきてにもとづいて制定された帝国憲法が廃止されようとして居たからである

時流

外つ国のいくさのきみに媚びつきて国を売るもの今国に△
充つ

（昭21）

△軍司令官、一軍を統帥する将軍、ここでは「マッカーサー司令部」

※「言論自由」とは

わが文もわが待つ文も礙(△さ)へられて言も通はぬ世とはなりぬる　（昭21）

※新聞、書籍、ラジオは勿論、個人の手紙までも開封して占領軍（G・H・Q）の検閲をうけた

△ふさぐ、さまたげる

たたかひの時にまさりてあらためのきびしき時となりにけるはや　（昭21）

◎たまきはるいのちささげて守り来しみくにのいのち今如何にある　（昭21）

◎「いのち」にかかる

戦災一周年の日 (一)

仇の火に焼け死にもせで死にまさる恥を見よとか生きてのこれる　(昭21)

(二)

あるは死にあるは囚はれ世にあるは山にこもりぬわれらが友は　(昭21)

常磐木のしみ立つ庭のかげ草はつゆのいのちの起き臥しどころ　(昭22)

△茂り立つ
※旧冬葉山堀の内の大滝亀代司氏の別荘に移り住むと詞書あり　六首の内

※述懐 (一)

国破れ身貴きはから人も恥ぢぬと聞くを大和男の子は

（昭22）

(二)

くに破れ身に幸あるはすめぐにの臣の男の子の道といふ

べしや

（昭22）

(三)

神代よりためしもあらぬ世にしあればためしもあらぬく

るしみもせむ

（昭22）

※論語に「邦有道、貧且賤焉恥也、邦無道、富且貴焉恥也」とあり

※公職追放になる友を救はんとして救ひ得ざりし苦悩の折の歌と聞く

△朝鮮または中国の人

△道と言ふことが出来やうか出来ない。即ち忠臣とは言へない

※囚はれの身を思ひて

世にあるもひとやにあるも一筋に行くべき道はますらをの道　（昭22）

※昭和二十年、二十一年当時は戦時中の指導者（軍人、政治家等）多数が戦犯としてG、H、Qに囚はれ或は公職追放を受けた

二月十一日

生き死にを超えし男の△雄建びによみがへるらむすめらみくには　（昭22）

△雄々しい叫びをあげること

世態

国破れ忠臣出づとふことわざをおもふもさびし世の有様は　（昭22）

※市ケ谷軍事裁判々決

(一)

△ことわりのさばきかあらず血にくもる刄(やいば)のむくい今はかくこそ

(昭23)

※極東国際軍事裁判のこと
戦勝の連合国が敗戦国日本を裁いたもので公正とは言へなかった
東京裁判とも言ふ
△道理、条理

(二) 死刑宣告

覚えなき罪をおほせて△殺さるる人の恨みの消ゆるとおもへや

(昭23)

△負はせる

(三) 一切の責を負はむとす

ありとある罪も報いも引きうけて死にゆく身こそたふとかりけれ

(昭23)

あめりかにろま※にろしやに人はつけやわれはみくにのとはのみ民ぞ　（昭23）

述懐（十二月十五日）

すめぐにのみ民と生れすめぐにのみ民と死なばわがねがひ足る　（昭23）

すめろぎの治ろしめす国慕ひつつ逝きにし人のしのばるるかな　（昭23）

※ろま＝ローマ法皇のゐる所（バチカン）即ちキリスト教とくにカトリックをさす

G・H・Q（占領軍総司令部）は昭和二十年十二月に神道指令を発して、日本の神社神道を徹底的に弾圧する一方キリスト教の宣伝と布教に大いに努めた

ろしや＝ソ連、敗戦後G・H・Qの命により、獄中より釈放されし当時の共産党はソ連一辺倒であった

基督教徒に　㈠

キリストがみくににあらばことくにの神ををがめといふ△
とおもへや　（昭23）

△異国

㈡

みづからのみおやの神は忘らえてとなりの神を説くがおろかさ　（昭23）

㈢

みづからのみおやの神ををろがみしイエスにならへイエスが侶（とも）は　（昭23）

「たまのまひびき」復活

ますらをがいつの雄建び[△①]蹈み建び[△②]歌詠み出でば岩戸開けむ[※]　（昭24）

戦敗に卑下[△③]することは戦勝におごる[△④]こころとわかたざりけり[△⑤]　（昭25）

おのが身に得難きものを子に見れば人のいのりはしるしありけり[△]　（昭25）

△① 威勢よく雄々しい叫びをあげること

△② 足を大地に蹈みつけて勇ましくふるまふこと

※ 古事記に「天照大神がこもられた天石屋から岩戸を開いて出られると暗かった高天原や葦原中国（世の中）が明るくなったとあり、その岩戸を開くのに八百萬の神々が集まって努力されることが記されてゐる

△③ へりくだること、いやしむこと

△④ 思ひあがりたかぶること

△⑤ 同じである

△ 証拠、あかし、霊験、ごりやく、ききめ、効能

戦死者を思ふ

たたかひに失せにし人のたましひのよみがへるときみくにおこらむ　（昭26）

大八洲とはのまもりとわだつみの底に沈みし人をしぞおもふ　（昭26）

△海、海の神

幽顕往来

かくり世とあらはにの世を往き来してためしもあらぬたのしみもする　（昭26）

△隠世、あの世、よみの国

△現世

目に見えぬ霊やよりくるうちつけに世になき人をおもひ出づるは　（昭26）

△突然、俄か、だしぬけ

十月二日御遷宮の日

つみけがれ禊ぎの雨と降る雨よいや降りしけやこころ足らひに　（昭28）

△① 身に罪または穢れのあるとき、又は重い神事などに従ふ前に川で身を洗ひ清めること
△② いよ〳〵激しく降れよ
△③ 満足するまで

たまさかに汲めばうれしきうまざけのくみのまがひに歌も成り来る　（昭29）

△乱れること。ここでは酒を盛んに酌みかはしてゐる中に

くさひばり

大君が聞こし召しけむそのこゑと聞けばかしこし虫の鳴く音も　（昭30）

明治天皇御製
草ひばり鳴きもぞやむと
秋の夜の月なき窓もさされざりけり

△⑦くだつ世の人はえ△⑧しらじをさまれる御代のみ民のふかきなげきは　（昭30）

△⑦末になる、衰へかゝる
△⑧知ることが出來ないだらう

掘ごたつ電気行火△(あんくわ)をとりつけて待つや今年の冬のたのしさ　（昭31）

△火を入れて手足を温めるもの、あしあぶり

幽(かく)り世と顯(あら)はにの世と隔(へ)なれどもともにすすまむおなじ　△へだたる

ねがひに　（昭34）

◎たまきはる生命のかぎり雄建びて命絶えなばわがねがひ　◎「生命」「内」「世」にかゝる

足る　（昭34）

うつそみはよし滅ぶともほろびざるいのちはのちもいよ

よ振はむ　（昭35）

百舌(もず)も鳴き柿も色づき山茶花(さざんくわ)も咲き匂ふらむ平戸島根は

（昭35）

人はよく同志△を言へどわれはただわがあやまちをかへりみむとす

（昭37）

△志を同じくすること、またその人。同じ仲間

うもれ木の花咲く身にはあらねどもすめらみくにの春ぞ待たるる

（昭38）

ありがたくおもふこころの有り無しによりて知らるる人のねうちは

（昭38）

☆わが友が来べきときなり湯をわかし待つ間うれしき午後のひととき

（昭38）

☆君が来る時刻となりぬ

腕力の足らはぬことは是非もなし阿諛迎合は恥とおもはむ

（昭39）

△1 仕方がない、やむを得ぬ

△2 おべっかをつかひ他人の意向を迎へてこれに合ふ様にすること。おべんちゃらをつかふこと

紙の上の平和の夢に酔ひ痴れて眠りてあるか昭和の民は

（昭39）

政治家をあやまたしめし学問のあやまりをこそ先づは思はむ

（昭39）

学問のあやまり国を乱るらむ昔も今も西も東も

（昭39）

志あ△ししといはずことわりのあやまりいつか国をみだりぬ

（昭39）

△悪かった

国は破れ世は乱れゆく時にしていよいよ思ふ忠と勇とを

（昭39）

世の中に事ある時ぞ知られけるすめらみくにの深き根ざ△しは

（昭39）

△根が土中にのびること、またその根

子をかへてをしふるといふことわりのまことを知りぬ年　（昭39）

△交換する

の経ぬれば

△松籟を聞きて寝よとふかなし子がいのりのままに母よね　（昭40）

△まつかぜ

むらな

姉と別る

さよならもまた来ますとも言ひえねばただ手を振りて別れ来にけり　（昭40・10・18）

山の井のそのみなもとは細けれど世をうるほさむことなからめや　（昭42）

※鎮西八郎

官位など屁とも思はぬますらをの豪快無雙忘るべしやは　（昭42）

打首のまたは流罪の先△覚をおもふこころにつとめつくさむ　（昭42）

※源為朝は鎮西八郎為朝と称し、少時より剛勇を以て知られた。保元の乱の際、為朝は官位を以て後白河天皇側に誘はれたがこれを断り、父為義と共に崇徳上皇側につき、平清盛、源義朝の軍と戦って敗れ、伊豆大島に流された

△世人より先に道理を覚り世を導くこと、またその人。学問上の先輩

※墓

ちちははのおくつきのへにちちははの墓より小さく墓は建てたし　（昭45）

※長崎県平戸市大辻にあり

※歌碑除幕

神のよさし人のなさけをおもほえばわがうたながらたふとかりけり　（昭45）

※平戸市亀岡神社境内に歌碑建立さる
（表）この見ゆる雲のはたてに君ありとおもふこころはたのしかりけり
（裏）神と人と君と民との根ざし合ひまつりまつらふ国はこの国

※台湾を思ひて（一）

「兵」は棄て「食」は棄つともあくまでも守らでやまじ「信」のひとこと　（昭46）

※昭和四十七年亜細亜大学青々会発行の『望南集』及び『続雲のゆきかひ』に八五首所載

(二)

信なくばわれさへわれを信ぜぬをいかに況(いは)んやとつ国び
とは　　(昭46)

△いかに況んや―まして

(三)

万世一系一貫不変の大君にふたことはなし世はかはるとも　　(昭46)

△二言はない、うそはない　綸言汗の如し

(四)

信義誠実ありやなしやにくらぶれば勝敗などはものの数
かは　　(昭46)

(四)

たたかひはよし敗るとも一貫の信実あらばなにか歎かむ

(昭46)

※述懐

吾子も病みわれもやまひて病むつまのこころのうちのおもはるるかな

(昭50)

※長男繁氏、国立民族博物館創設準備の激務のため単身赴任中一酸化炭素中毒にて重患となり阪大病院入院中の歌
「生き死にのさかひゆく子のいのちはもいのりいのらむ外なかりけり」
「うつせみの身もたましひもまたけくをさづけたまへや病めるこの子に」
等二十五首あり

著者の略歴

明治二十四年　二月二十二日長崎県平戸市に生る。
明治四十二年　長崎県立中学猶興館卒業。
大正六年　東京帝国大学法科大学政治学科卒業。同大学院にて憲法および行政法を専攻。
大正十年　法政大学教授となり、東大、早大、明大、拓殖大、国学院大等の講師を兼ねる。
大正十五年　ドイツのイエナ大学に留学。その後欧米各国にて研究。
昭和三年　帰朝の上、新設の台北帝国大学文政学部教授となる。
昭和十一年　国民精神文化研究所員となり東京に移る。傍ら陸軍大学校、東京工大、大東文化学院等に出講。
昭和十九年　七月退官。
昭和二十年　五月二十五日空襲により東京私宅全焼。
昭和二十二年　東京裁判に弁護側証人として出廷し証言す。
昭和二十六年　葉山より東京文京区小日向に帰り住む。
昭和二十八年　新設された亜細亜大学教授となる。

昭和三十三年　宮中新年歌会始詠進歌「雲」預選。
昭和四十六年　亜細亜大学教授を退く。
昭和五十三年　三月二十七日歿　享年八十七歳。

主なる著書

（歌　集）

昭　和　六　年　『雲のゆきかひ』　（巌　松　堂）
昭和四十二年　『雲のはたてに』　（井上孚麿先生歌集刊行会）
昭和五十五年　『みだれ雲』　（〃）
昭和五十五年　『続雲のゆきかひ』　（〃）
昭和五十六年　『繞雲のはたてに』　（〃）

（憲　法）

昭和十一年　『所謂天皇機関説について』
『帝国憲法制定の精神』
昭和十二年　『御製を拝して　―戦争に就ての反省―』

昭和三十四年　『憲法研究』（神社新報社刊）
昭和三十九年　『ポツダム宣言に所謂デモクラシーと憲法・国体』
同書謄写印刷版は昭和二十一年発行
昭和四十二年　『ポツダム宣言と憲法改正』
同書謄写印刷版は昭和二十一年発行
昭和四十六年　『増訂憲法研究』（神社新報社刊）
昭和五十年　『現憲法無効論』（日本教文社刊）
昭和五十四年　『井上孚麿憲法論集』（神社新報社刊）

後記

さきに井上孚麿先生歌集刊行会により、昭和五十六年十二月に『統雲のはたてに』を出版して、井上先生の御生涯のすべての時期の詠草が世に出ました。それは大正十五年より昭和五十三年に八十七歳で亡くなられるまでの歌で、左表のやうに歌の総数は約壱万参千首に達してをります。

歌集名	作歌年月	歌数	出版年月	発行所
雲のゆきかひ	(大15年5月〜昭3年3月)	一五四八首	(昭和6年　)	巌松堂
統雲のゆきかひ	(昭和3年〜昭和10年)	二一一〇首	(昭和55年12月)	歌集刊行会
みだれ雲	(昭和11年〜昭和19年)	一七六九首	(昭和55年3月)	〃
雲のはたてに	(昭和20年〜昭和38年)	四五九〇首	(昭和42年11月)	〃
統雲のはたてに	(昭和39年〜昭和53年3月)	二九二〇首	(昭和56年12月)	〃
合計		一二、九三七首		

この厖大なる歌は、憲法学者としてまた歌人として、先生の各時期における考へや人

間像、交友関係等を知るにはまことに意義深いものがありますが、多くの人が手軽に読むにはあまりに多きに過ぎて、歌の鑑賞には不向きな面もありました。歌は本来歌ふべきもので、声に出して幾度も詠じてみてその調べやひびきも分り、まことの鑑賞も出来るものであります。そこで今回は歌集を手軽に持ち歩き、折にふれて幾度も幾度も口ずさんで貰へるやうにと願って小型の秀歌集を作ることを考へました。このことは先生の御生前にも一度お願ひしたことがありましたが、先生は自選をされないままに昭和五十三年に御他界されましたので、「歌集刊行会」としましては、先づ先生の予定してをられました原稿をもとに、前記四冊の歌集を刊行致しました。然しその後、先生がよく口にされた歌や、私が憶えてゐる歌なども、人に聞かれて何時頃の作か確かめてみようと思っても、歌集が多く且つ大きいのでなか〳〵見つからないことが多く、せっかくの名歌も大歌集の中に埋没してしまふ憾みがあり、まことに残念なことと思ってをりました。然し此度有隣堂の好意により発売元を引受けて頂きましたので、日頃念願の秀歌集を出版することとなり、心から有難く思ってをります。

先生の歌は、いはゆる歌人と称する文学の徒の歌とは異り、憲法学者としての深い学問に裏うちされた憂国の至情を、小手先の技巧を弄せず正々堂々とうたひ上げた格調高き真心の歌であります。祖国の敗戦により日本が大きく傷つき、歴史観が大転換した時

代に於ても、卓越した洞察力と不動の信念をもって貫き通した高潔至誠の大哲人の歌であります。

戦後三十余年の今日 経済の繁栄のみが優先し、衣食足りて礼を知らず、中・小学生までが教師に暴力をふるふごとき精神の荒廃は、まさに目を覆はしむるものがあります。然しその原因はその親でありその教師であり、更にその源は、その親や教師の育った社会、即ち敗戦占領憲法下の日本の教育に起因するところ大なりと言はねばなりません。憲法学者として先師が常に憂へてをられたことが、徐々に悪果をむすび世に現はれ始めたと言ふべきでありましょう。この歌集を読まれる方は、戦争前後の著者の信念と見識また国を思ふ至誠に触れ、いま一度日本の歴史を、敗戦自虐の歴史観から解放されて、公平な正しい歴史観で見直して貰ふことを願ってやみません。

歌の選に当っては、先年『続雲のはたてに』の選歌をした時と同様、先師のみたまの御加護を念じつつ、一読直感によって選びました。即ち大正十五年より昭和十九年までの五、四〇〇余首の中からは先づ九六〇首、次に戦後の昭和二十年から昭和五十三年までの七、五〇〇余首の中からは一、二〇〇首を選び、第一部第二部とし、その各々を印刷配布して、寛泰彦先生始め二十年以上先師（著者）の指導をうけた相原良一、石井良介、野中忠夫、森泉政雄の先輩諸氏に各〻約三〇〇首の選をして貰ひました。先生の歌

はその特徴として連作が多く、一連として思ひを述べたものが大部分であります。心の動きのまゝに言霊として湧き出でた一連の歌の中で、どの歌をとるかは人により多少の好みの差があり、随って五人で選んでも三人以上重なって選んだ歌は二〇〇首に満たず、結局、僭越ではありますが最後は私が取捨選択してこの三七一首を決定致しました。最初は名歌といふことを基準に選びましたが、中途より先生の終生の念願でありました憲法復原に関する歌と、時代的に意義深き歌を収録し、最も多い師弟、交友関係の歌は大部分削除致しました。従って歌としては必ずしも名歌と言へない歌も多少は混じってゐます。また編輯内容としては、相聞、歌、自然、神、国、生命、憲法等、内容により区分し、説明のため下段に多少の註解を附し、また語句の解釈、類歌の有無等も書き加へました。これは和歌になじまない若い人達にも理解して読んでいただくために、その便宜を考へてのことであります。

最後に、著者の崇敬してやまぬ　明治天皇を祀る　明治神宮宮司の高澤信一郎氏に対し格別の御配慮をもって序文を賜はりましたことを心から御礼申し上げます。また此の歌集の出版にあたり心よく御諒承御援助を賜はりました先生の御子息井上繁・實の御兄弟及び多大の便宜を与へて下さった有隣堂社長松信恭輔氏、常務取締役田宮拓夫氏に対し厚く御礼を申し上げます。また印刷、校正等に御尽力下さった森泉政雄、石井良介、

相原良一の諸氏と難病の苦痛に堪へつつ病床より選歌に御協力下さった野中忠夫氏 並に原稿の浄書をお手伝ひ下さった「あをぞら短歌会」の 本村清子様に対し深い 感謝と敬意を捧げるものであります。

ひもろぎに懸くる玉しで床にかけうつしゑ仰ぎ師の歌を選る

師のみ歌よみつぎゆけばたしたしに師はわがうちによみがへります

師のうたの数ある中にうたひつぎうたひ残さむ歌をこそ選べ

すめらぎの臣の男の子の国を思ふ深き祈りのひびきをぞ聞く

ひとことを祈り祈りし益荒男の言霊いかで振はざるべき

昭和五十八年三月二十七日　先師の五年祭の日

安　元　繁　行

不許
複製

昭和五十八年十月二十日印刷
昭和五十八年十一月六日発行

井上孚麿秀歌集

定価　一、〇〇〇円

著者　井上孚麿

発行所　井上孚麿先生歌集刊行会
東京都世田谷区奥沢八―三六―五
（安元繁行方）
電話　〇三（七〇四）〇〇三四番

印刷所　いづみ印刷

製本所　渡辺製本株式会社

横浜市中区伊勢佐木町一―四―一

発売元　株式会社　有隣堂
電話（〇四五）二六一―一二三一㈹

井上孚麿 秀歌集